高橋裕先生を偲んで

河村　明
KAWAMURA Akira
東京都立大学　都市環境科学研究科
都市基盤環境学域　名誉教授

1. 高橋先生が雲の上の頃

私が水文・水資源学の研究を始めたのは九州大学の修士1年の時で、奇しくも昭和53(1978)年の給水制限日数287日という未曾有の福岡大渇水が発生した年でした。最初の研究テーマは本渇水時における貯水池の利水操作に関する内容でした。その当時、高橋先生は既に東京大学教授で、水文・水資源学のみならず土木分野の大家であり、私にとっては雲の上の存在でした。

その後私は九州大学で博士後期課程・助手・助教授として研究を続けましたが、当時高橋先生と国内の研究発表会などでお目にかかれた記憶は余りありません。しかし、先生の著作は大いに参考にさせて頂き、特に市民向けの水に関する講演を何度か行った時には、1982年発行で高橋先生が編集された技報堂出版の『水のはなしⅠ、Ⅱ、Ⅲ』は、多くの水に関する技術をテーマに大変分かり易くかつ興味深く解説されており、講演資料として目から鱗であった思い出があります。

2. ユネスコ国際水文計画の頃

高橋先生は、1987年東京大学を還暦で退官され、芝浦工業大学の教授となられた後、1988年から1996年までユネスコ国際水文計画(IHP)の政府間理事会で日本政府代表を務められており、また1993年にはIHPの東南アジア太平洋地域運営委員会（RSC-SEAP）を設立されその初代議長を務められました。

高橋先生が芝浦工業大学を退職される直前の1998年3月、IHP傘下のプロジェクトAP-FRIENDの関係で、日本から高橋先生および私を含め総勢11名の研究者が、ニュージーランドの南島の中心都市クライストチャーチの国立水大気研究所（NIWA）を訪問し、研究発表や意見交換を行うとともに南島の水文調査を行いました。

実は、私はその前の1996年3月から1997年3月までの1年間クライストチャーチのNIWAで在外研究を行っており、当時のNIWAの研究者とは太い繋がりがありましたので、私は日本団のNIWA訪問のアレンジなどを行いました。

日本団は私も含めその後次の目的国であるオーストラリアへ向かいましたが、高橋先生と菅先生（当時芝浦工業大学助教授）は引き続きニュージーランドの河川調査を希望されたので、NIWAでの友人でありニュージーランドの河川に詳しいAlistair I. McKerchar博士に南島の河川の現地案内と説明をお願いしました。（**写真-1**）そのお礼として、高橋先生より岩波新書の『都市と水』を賜り、今でも本当に大切な記念の品となっています。（**図-1**）

写真-1　1998年3月NIWAにて
（左より菅先生、筆者、McKerchar博士、高橋先生）

前述したRSC-SEAPの会議は1993年の第1回から現在まで毎年、東南アジア太平洋諸国のどこかの都市で開催され、通常それと一緒に国際シンポジウムも開催されています。私はその国際シンポジウムの第8回（2000年）から第23回（2015年）までの間で12回参加しており、高橋先生ともそのシンポジウムで何度かお話しさせて頂きました。特に2003年フィジーのシンガトカでのシンポジウムは有意義で大変楽しい思い出として残っています。（紙面の都合上写真は省略）

図-1　高橋先生より賜った本の中表紙

3. 高橋先生の著作の影響

高橋先生は、何十冊もの水や土木史に関する幅広いテーマの著作を執筆・編集され、私はそのうち20冊程度を所持していますが、特に、岩波新書の4冊すなわち『国土の変貌と水害』(1971年)、前述の『都市と水』(1988年)、『地球の水が危ない』(2003年)、『川と国土の危機』(2012)、そして山海堂の短編随筆3部作すなわち『河川にもっと自由を－流れゆく時代と水－』(1998年)、『河川を愛するということ―川からみ見た日本と地球―』(2004年)、『社会を映す川―災害多発時代の自然・技術・文化―』(2007年）は、私の水問題や河川さらには土木分野全般に対する視野を大きく広げ、その後の研究者としての人生観に多大な影響を及ぼしました。

もちろん、技術論文などを執筆する際には、高橋先生執筆の『河川工学』(東京大学出版会、1990年）や編集された『川の百科事典』(丸善出版、2009年)、『全世界の河川事典』(2013年）は常に参考にさせて頂いております。なお、私は後者の事典のスウェーデンおよびニュージーランドの河川を担当させて頂きました。

4. 念願のご自宅訪問

2004年高橋先生が喜寿を迎えられた年の10月に私は東京都立大学に赴任し、主に都市域の水害や水資源問題をテーマに研究を続けることとなりました。その頃から、岩波新書や本協会誌に紹介されていますが、高橋先生がご自宅で実践されている雨水有効利用、地下水涵養、流出抑制の一挙三得の雨水貯留浸透システムを是非ともこの目で拝見したいと思っていましたが、なかなか機会に恵まれませんでした。

そして、高橋先生が卒寿を迎えられる直前の2016年の12月、私は本協会誌の編集委員長を仰せつかり、そのご縁により2020年1月高橋先生が93歳の誕生日を迎えられる直前となりますが、私の念願が叶えられる機会を頂くことができました。(**写真-2**）また、今回本原稿の執筆に当たり、参考文献1）より、高橋先生の生い立ちや論説家・俯瞰する歴史家として培われた河相観を改めて深く知ることができました。ここに深謝申し上げます。

最後になりますが、高橋先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

写真-2　2020年1月高橋先生のご自宅にて

＜参考文献＞

1）篠原修：河川工学者三代は川をどう見てきたのか－安藝皎一、高橋裕、大熊孝と近代河川行政一五〇年，農文協プロダクション，2013